

### 第3回「タイ・スタディツアー」を実施して

#### ～津波被災地でのボランティア活動とタマサート大学との連携プロジェクト

##### 1. タイ・スタディツアー2007の概要

スマトラ沖津波をきっかけとしてはじまった「タイ・スタディツアー」は今年で3度目の実施であった。このプログラムは以下の2つの活動を柱としている。第一に、スマトラ沖津波で被害を受けた南タイのタブタウン村<sup>1</sup>でのボランティア活動である。参加学生は、遊びのボランティア活動を通して、津波が地域社会にもたらした被害の実態を理解するとともに、ボランティアの意義と課題について学習する。今年度はタブタウン村に加えて村の子どもたちが通学する近隣地域の学校（Rajchaprachanukroh 35 School）を訪問し、日本文化を紹介した。津波後高台に移築されたその学校には、津波で親を亡くした子どもたちのための寮が併設されているなど、津波の爪あとをまざまざと感じさせられた。第二の柱は、本学協定校であるタマサート大学とのジョイントプログラムである。タマサート大学生と本学生がプレゼンテーションやディスカッション、及び合同ボランティアを通して、ボランティアが必要とされる社会的な背景を理解したり、活動の目的、内容、手法などを研鑽し合うことを目指した。今年はじめて実施した合同ボランティアでは、学生たちはバンコクのスラム街と称される線路沿いのコン・ラッド・ファイ・コミュニティで、子どもたちを対象に活動をおこなった。このコミュニティはバンコクの中心部にありながらも、外から訪れる人が少なく、閉ざされた環境で生活を営んでいる地域である。タマサート大学社会福祉学部の学生たちは、週1回このコミュニティを訪れて、子ども向けに「信頼」や「協力」を体験的に学べるような遊びのプログラムをおこない、コミュニティの生活向上を支援している。本学生とタマサート大学生はダンスやゲームを通して子どもたちと交流した。本学生が準備していた「ソーラン節」や「ジェンカ」などのダンスは、子どもたちから好評で、タマサート大学生も加わって踊った。タマサート大学生と協力して作り上げた活動は、一時的なものかもしれないが、コミュニティに活気をもたらすことができた。

出発前のオリエンテーションでは、津波発生直後に現地取材したカメラマンから、当時の被害状況について克明に伺った。また本学に留学しているタマサート大学生からは、タイの社会や文化の紹介、及びタマサート大学生が津波直後におこなったボランティアについて、自らの体験をまじえて紹介してもらった。【表1】に「第3回タイ・スタディツアー」の活動をまとめた。

---

<sup>1</sup> タブタウン村は、タイ政府に数十年前まで国民として認められていなかった「モーケン」という少数民族が住む村で、社会的に孤立しがちな状況であった。その村に2004年、10メートル近くの津波が押し寄せ大被害をもたらした。海外のNGOは家の建設、インフラ整備、漁業再開のための船の寄付など、村人の生活再建のための活動にあたった。タイのNGOであるチルドレンファンデーションは、子どもたちの支援のため村のなかに児童館をつくり食事の提供や精神的なケア、日常生活へのスムーズな復帰などのサポートをおこなっていた。ボランティアセンターはチルドレンファンデーションから「遊びのボランティアをしてほしい」という依頼を受けた。

【表1】第3回「タイ・スタディツアー」

オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆スマトラ沖津波について(読売新聞カメラマンによる現地取材報告)</li> <li>◆タイ社会と文化について(タマサート大学からの留学生による)</li> <li>◆南タイ復興支援の現状と課題(日本国際ボランティアセンターによる)</li> <li>◆ボランティア先での遊びの準備</li> <li>◆タマサート大学でのプレゼンテーション準備</li> </ul>
タイでの活動(タマサート大学と連携)	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆タマサート大学で「ボランティア」をテーマにプレゼンテーション&amp;ディスカッション</li> <li>◆タマサート大学生とコン・ラッド・ファイ・コミュニティでのボランティア</li> </ul>
タイでの活動(パンガー県での活動)	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆タブタウン村で遊びのボランティア</li> <li>◆カオラックの学校でのボランティア</li> <li>◆被災地見学</li> <li>◆タブタウン村での活動について、チルドレンファンデーションスタッフ等からフィードバックを受ける</li> </ul>
タイでの活動(タマサート大学と連携)	◆活動のまとめと発表
帰国後ミーティング	◆タイ・スタディツアー振り返り
フォーラム準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆フォーラムの企画と準備</li> <li>◆報告書の作成</li> <li>◆参加学生による発表準備</li> </ul>
フォーラムの開催	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆テーマ「スマトラ沖津波からはじまったつながり～タイで学び、そして伝えたいこと」</li> <li>・参加学生による「タイ・スタディツアー」報告</li> <li>・学生とゲストのパネルディスカッション</li> <li>[ゲスト]齊藤幹也氏:国際協力機構(JICA) 前タイ事務所 事業企画担当</li> <li>下田寛典氏:日本国際ボランティアセンター(JVC) 津波復興支援担当</li> <li>◆特別企画「スマトラ沖津波の映像上映会」&amp;「さをり織り」プロジェクト紹介</li> </ul>
プログラム総括会	◆プログラム全体の振り返り

## 2. 参加学生たちの体験とその意味について

第3回「タイ・スタディツアー」の活動を通して、学生たちはどのようなことを考え、学んだのだろうか。学生たちの体験とその意味について、ミーティングの記録や学生がボランティアセンターに提出した報告書やフィードバックシートをもとに整理したい。

1点目として、「ボランティアとは何か」について体験を通して考え、探求する経験をしたことがいえる。「ボランティアについて一方的な援助の気持ちをもっていましたが、ミーティングでの話し合いを重ねていくうちに、根本的にボランティアの意義を考えるようになった」、「タイで子どもたちと遊んだ経験は、ボランティアについて新たな考え方を教えてくれた。大きな支援はできなくても自分たちができることをすることが大切なのだ」と報告しているように、学生たちは「ボランティアとは何か」についてそれぞれに向きあい、その答えを出していた。

2点目は「学生たちのボランティア活動は受け手となった人にどのような意味をもたらすことができたのだろうか」について、現地のスタッフからのフィードバックを手がかりに考察した。「タブタウン村の子どもたちに、みんなが仲良くすることの大切さを伝えたくて、『猿蟹合戦』の人形劇をおこなった。タイ語が難しく子どもたちに劇の内容がどこまで通じたか不安だったけれど、チルドレンファンデーションのスタッフから、子どもたちは劇の後に『けんかをしないで、みんなで仲良くしよう』と話し合っ

ていたことを教えてもらい、嬉しかった」、「現地ガイドの方から言われた『子どもたちは、次に楽しいことがあれば、すぐに今日の遊びのことは忘れてしまいますよ』という言葉にショックを受け、自分たちのボランティアに意味があるのか悩んだときもあった。でも、タブタウン村での活動のコーディネーターが、たとえ短い時間でも子どもたちに幸福感を与えることに意味がある、とってくれたように、子どもたちと遊びで一体感をもつことができたことで、活動には意味があったのだと思う」など、自らの活動の意味や限界について考察する姿がみられた。

3点目は活動を通しての人との出会いである。「別れの場面でなかなか離れてくれない子どもたち」、「高い志と計画性をもってコミュニティでの支援にあたっているタマサート大学生」、「初めて海外のボランティアに参加し、自信を失いそうになったとき、支え続けてくれた先輩」、「ミーティングで活動における課題を鋭く指摘した仲間」、「タブタウン村の子どもたちと根気よく接し続けている、チルドレンファンデーションスタッフ」など、学生たちはたくさんの人との出会い、そこから自分のあり方や将来について見つめ直していた。

4点目は学生の内面的な変化である。「これまでは興味があることについて、すぐに取り組まず『そのうちにすればいいや』と片付けてしまっていたが、自分から踏み出すことの大切さがよく分かった」、「これまで受身だったが、リーダーとして積極性も身につけるよう変わらなくては」と述べているように、精神的に成長がみられた。

5点目は活動を通して感じた疑問を探求することから得られた学びである。「タブタウン村の住人たちの収入の向上など、目に見える形での活動に取り組むべきだったのだろうか」、「自分たちは被災地に何をすべきだろう」という問いをもつようになった。それらの問題意識を深めていくプロセスのなかで、津波で被害を受けた人たちの精神的ケアに取り組む NGO や学生ボランティアを支援する企業の担当者などから、被災地の支援のあり方や学生ボランティアの意義などについて話を伺った。「被災地では生活再建など物理的支援だけが求められているのではなく、目にみえない活動こそが大切なこと」、「『なぜ?』」と思い、悩んだり考えたりすることが大切であり、自分たちで考えボランティア活動をおこなうことで成長していけることが、学生ボランティアの意義ではないか」など、学生ボランティアに関する多面的な考えに触れることを通して、自分たちの活動の意義を振り返り、深めていった。また、事後活動として取り組んだフォーラム「スマトラ沖津波からはじまったつながり～タイで学び、そして伝えたいこと」では活動報告の後、その意義を考えるパネルディスカッションをおこなった。ゲストとして JICA の前タイ事務所事業企画担当者及び日本国際ボランティアセンターの津波復興支援担当者を招いて、津波への支援や学生ボランティアの役割をテーマにディスカッションをおこなった。「現地のニーズを事前を知るための工夫として、どのようなことをしているか」、「短期間で継続的な活動ができず、技術をもたない学生が海外の被災地で活動することの意義は」、「支援を終了させるときの判断の基準は」などについて活発に意見交換された。国際協力活動を専門としている JICA のスタッフや NGO 活動に取り組む学

生たちにとっても、このような意見交換は「ボランティアの原点をもう一度見つめなおす機会となりよかった」というコメントをいただいた。

### 3. まとめ

第3回「タイ・スタディツアー」のまとめにあたって、以下の3点について述べたい。まず、ボランティアの受け入れ先にとっての意味である。「タイ・スタディツアー」は2005年8月に津波被災地へのボランティアが目的としてはじまった。「5000人以上が亡くなった被災地において、タイ語を話せない学生ボランティアが果たせる役割は非常に限定的であるか、もしくは全くないのかもしれない。せめて邪魔にならない範囲内で活動を実施する」ということが、出発点であった。2006年に訪問した際に、タブタウン村の子どもたちから「来年もまた来てくれるの?」と問いかけがあった。学生たちによる活動は、村の子どもたちから「期待される」存在になることができたことと知り、学生による活動が被災地の人々にとって意味あるものとして受け入れられたと感ずることができた。そして、この基盤をもとに活動を継続し、さらに高めていくことを目指した。2点目は、参加学生にとっての意味についてである。この点については、「2. 参加学生たちの体験とその意味について」で述べているが、被災地でボランティアをおこなうことの意味は、所与のものでなく根気強く継続することでその意味が見出されるものであること、またその評価はボランティアの受け手となった人がおこなうものだ、という現実を受け入れた上で、「ボランティアとは何なのだろうか」、「タイでの自分たちの活動に意味があったのだろうか」と考え、意見を交換することでボランティア本来の意味を学んでいったといえる。また、「タイ・スタディツアー」への参加を通して、自分に影響をもたらす他者と出会い、精神的に成長していったという意義もあった。3点目として、タマサート大学との連携の意義である。タマサート大学生と本学生の合同ボランティアを通して学生たちは学びと今後の課題を獲得していた。このような相互交流による効果は両大学が共通して感じている成果である。また、タマサート大学では今年本学ボランティアセンターをモデルとして、ボランティアセンターが設立される予定である。今後はボランティアセンター同士が連携して活動をおこなうなど、両校の連携・協力がさらに発展することが期待される。

最後に、「タイ・スタディツアー」は、暖かく迎え入れてくれるタブタウン村の皆さん、また、タマサート大学、チルドレンファンデーション、現地コーディネーターのポー氏らの献身的ともいえる協力に支えられ活動をおこなうことができた。この方たちの支援に心より感謝し、スマトラ沖津波からはじまったタイでの活動がより一層充実したものとなるよう、さらに力を注いでいきたい。

(糸井)